

助け合いから生まれる社会

名古屋市立萩山中学校

3年 清水 美胡

「ランドセルって言うて。」

当時小学一年生の私は「さ、し、す、せ、そ」をうまく言えなかった。そのため、友達からサ行がつく単語を言わされ、からかわれたことが何度もあった。そんな時、担任の先生から紹介された施設が療育センター。約三年間、月に二度言語聴覚士の方と三十分の訓練を行った。おかげで、今ではサ行を正確に発音することができる。

訓練を終え、何年か経ったある日、私はふと、あの時一体いくら支払ったのか疑問に思い、母に聞いたことがあった。その時の回答は「無料だよ。」よくよく考えてみれば、母がセンターの受付で支払いをしている姿を見たことはなかった。母が月に一度提示していたものは医療証と保険証。私が受けた訓練は税金の補助により、実質無償になっていたのだ。もしも、税金による補助がなかったら一体いくら支払うことになっていたのだろう。金額によっては訓練をあきらめていたかもしれない。税金の恩恵で私は話すことが嫌いにならずにすんだ。つまり助けられたのだ。

その他にも私は様々なことで税金の恩恵を受けている。例えば、図書館の自習室。家では誘惑が多く、勉強に集中できない私にとって冷暖房完備で朝から夕方まで開放している図書館は有難い。また、今年の春休み、名古屋市の行う「豪・ジロング市との湿地提携に基づく交流事業」に応募、名古屋市代表の中学生十八人のうちの一人としてオーストラリアを訪れた。その際の自己負担額はわずかなもので、残りは税金から支払われた。私の海外の文化を体感したいという夢を応援してもらった。補助がなければ私はあきらめていたかもしれない。税金は私の夢を後押ししてくれたのだ。

税金の恩恵を受けているのは、なにも私に限ったことではない。日本に生きるすべての人が税金の恩恵を受けているのだ。今年の元日、石川県能登半島を襲った巨大地震。最高震度7の地震に八千を超える家屋が全壊、約二百四十名の方が犠牲となった。その際も税金は避難所で生活する方々の食糧や衛生用品、倒壊した家屋の解体、撤去費用に充てられたりした。税金は、避難後の被災者の命綱でもあったのだ。

私もあと三年で十八歳、成人だ。私は今日まで、多くの税金の恩恵を受けて育ってきた。それは大人たちが豊かで安心して暮らせる未来のために、多くの税金を納めているからだろう。次は私たちが納める番だ。皆で税金という名の会費を出し合い、すべての国民が安心安全、健康で文化的な最低限度の生活ができる社会を作る。とてもすばらしい制度だと思う。この社会の助け合いの在り方を続けなければならない。そのためにも、一人一人が税金をしっかり学び、理解する必要があるだろう。私も将来、働き手となった時は正しく納税し、それを誇りに思える大人でありたい。